

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別供米定率第六一七号
昭和二十一年六月二日発行（第百一十二巻第六号）

ホトトギス

六月号



風雅の小筥〔二十九〕

廣太郎

令和二年二月十五日、芦屋の虚子記念文学館に於いて日本伝統俳句協会主催の「国際俳句シンポジウム」が開催された。毎回思うのだが、日本の俳句の短さ故なのか、それをどうにかして外国語、特に英語等の欧米の言葉で、特にアメリカだったと思うが「HAIKU」なる詩を生み出しているようだが、それがよく私には判らないのである。今回のシンポジウムでは「俳句とは」という、考えれば壮大なテーマで話し合われたのであるが、やはり英語の「俳句」が例に挙げられた。それについて批判等をするつもりは無いが、世界にはその国独特の詩がある事も紹介され、例えば韓国の「時調(しじょ)」という短詩は、一首が三章からなる定型詩で、一章が四単位、一単位は三、四字から作られる約四十五字の詩だそうである。そして日本でも俳句以外に短歌、川柳は何方でも知るところである。考えてみると、私が知らないだけかも知れないが、韓国の時調や、短歌、川柳は外国語で表現しようとする試みは無いのだろうか。確かに俳句は中でも一番短い、という事になれば、それでは川柳は同じ五・七・五である。今ではそんな暴言を吐く人は居ないと思うが、俳句に比べ川柳の方が格が下だ、という話を風の便りに聞いた事があるが、とんでもない話である。川柳は俳句と違い、風刺を効かせた、俳句とはジャンルの違う立派な短詩である。私が思うに、俳句の季題が欧米の方々には馴染が少ないという事を聞いた事もあり、それならば川柳のウィットが却って欧米の文化に近いのではないかと思うのだが、如何だろう。

旬日記 汀子

令和元年六月一日 芦屋ホトギス会

六月の空晴れてゆく晴れてゆく
短夜の朝帰りとはなりにけり

六月二日 下萌旬会

何の花 紳の花と答へけり
勝負より馬が好きてふ競馬かな
こはごはと覗いてみたき蛇の衣
蛇ぎ心給はる百合の香でありし
六月三日 ロイヤル俳壇

鰻食べ来たる 元気な顔揃ふ
雨を待つ心にありて七変化
くり返す日々に加はる五月雨

六月十一日 大阪倶楽部

入梅と言ひまだといふ二三日
歩き来し薄暑鎮まり行く時間
訪ね来し人に見てある薄暑かな
又一つ増えし薄暑のスケジュール
動くまで気づかぬ蚯蚓動きけり

六月十一日 綿業倶楽部

蝸牛石に紛れてをりにけり
鈴蘭を見かけぬままに旅終る
さはられて石に戻りし蝸牛
通りたる跡を辿れば蝸牛

六月十三日 清交社

五月雨に滯在終へし帰路となる
打合せ済み五月雨の街に出る

この道はいつもの家路柿の花
蚯蚓とは見えぬ大きき吉野山
旅多き日々となりつつ梅雨に入る
コーヒーか紅茶か梅雨のおもてなし
賞金をふるまひ給ふ梅雨の会
六月十四日 工業倶楽部

結局は 鰻 十人なる 集ひ

五月雨や少し余裕を持つ外出
育ちたる高さに咲いて合歡の花
合歡の花咲く旅路あり近づきぬ

六月十五日 北近畿ホトギス俳句大会前日旬会
山深き 寺苑は 鳥の 夏世界
降り立てば梅雨の気配に包まる

蝸牛動かぬ世界ありにけり
六月十六日 北近畿ホトギス俳句大会

旅晴れてどこかが梅雨でありしこと
露涼し晴れゆく大地輝かす
青空と涼しき雲と入れ替る

六月十八日 有恒俳旬会

蝸牛見て過ぎてゆく時間あり
夏帽子とればいつもの彼女かな
捕へたる蝸牛にも自由あり
咲きつづく今朝は何色七変化
蝸牛自由の早さありにけり
飼ふことになりし箕面の蝸牛

六月十八日 無名会

遠き旅三瓶の夏野近づけて
薫風に長き旅路であることを
風か鳴き風の添ふとて夏の野よ
風渡る夏風の広さありにけり
薫風や雨も止みぬし旅心

命あるものに薫風限りなく
六月十九日 夏潮旬会

合歡の花見下ろす場所に案内せん
湖の風青蘆に来て消えてをり
飾られし紫陽花を地に下ろしたる
蟻地獄孤獨の命ありにけり
これ以上大きな蟻はなかりけり

六月二十一日 アネモネ旬会

栗の花匂ふ丹波路なつかしく
窓閉めて栗の花の香残りけり
梅雨忘れられぬ旅路でありしこと
踏んであしものが蚯蚓と分かるまで
厳戒の中を抜け来し梅雨の旅

六月二十三日 旬会と講演の会

夏至過ぎて何か追はるる心かな
山の蟻には別世界ありにけり
しばらくは代田のつづく旅路かな
日曜と知つてある蟻をりにけり
よく見れば蟻の世界の中にをり

六月二十四日 きざらぎ会

清潔を旨とし微は寄せつけず
配らるる数は均等さくらんぼ
旅宿の徴寄せつけぬ配慮あり
することはして来し菅の徴匂ふ

六月二十七日 淡路島

通々と来られし梅雨もいとはずに
一団を乗せたる梅雨のバスを待つ
六月二十八日 時雨旬会

厳戒の中梅雨の旅なりしかん
あるがまま暮らす幸せ花みかん
鰻かと問へば穴子でありしこと

廣太郎句帳

廣太郎

令和元年六月一日 芦屋ホトギス会

六月や初孫連れて吾子歸る
 初孫に会へる日を待ち明易し
 曲ること運命のやうに蟻の道
 六月二日 野分会 芦屋例会
 溝浚へ水裏返したうらがへし
 夜は星に近付きたくて立葵
 六月二日 青嵐会 芦屋例会
 五月闇より初孫といふ光
 蚊遣買ひ足して初孫待つてをり
 五月闇 払ひ初孫誕生す
 初孫の帰りを待ちて蚊遣焚く
 六月四日 カトリック新聞選者吟
 初孫を迎へる準備 聖五月
 六月六日 蕉心会
 初孫の泣いて眠つて明易し
 今年竹館の気品に伸び行けり
 初孫に重ねし若竹の勢ひ
 緑蔭に入りて街騒遠ざけり
 新緑の色の個性や館の木々
 下町に咲く白百合の雅かな
 入梅は明日か明日かと恐れけり
 夏の川芥は過去へ流れゆく
 六月七日 六甲会
 吃水を下げ夜釣舟戻り来る
 今日よりは免許返納して夜釣
 東京湾仕事帰るといふ夜釣

独り居や十葉の香を友として
 初孫の顔を見てより夜釣へと
 初孫の為に十葉咲かせもし
 街の灯と決別したる夜釣の灯
 六月九日 日本伝統俳句協会連帯総会
 明易や孫に送られ総会へ
 六月十日 朝日カルチャー若草句会
 濡れ色に暮れてゆくなり初蛭
 十葉を遠ざけてゐる二人の夜
 疲鶴に水微笑んでをりにけり
 鶴舟待つ闇柔らかくなつて来し
 蛭に照らし出されし逢瀬かな
 濃き闇を来て蛭火といふ出会ひ
 六月十三日 土筆会
 アイリスに紫の風宿る午後
 アイリスの庭へ初孫退院す
 六月十三日 松山牧子様句集序句
 旅土産とは思ひ出と薫風と
 六月十四日 北國文芸選者吟
 人生を下に見てゐる燕の子
 六月十五日 北近畿ホトギス俳句大会
 夏霧を押し上げてゆく鳥語かな
 句碑に寄す五月雨傘を傾げつつ
 ハンドルを今日は握らぬ母涼し
 六月二十日 前議員句会
 黒南風や空降りて来るおりてくる
 微の香を許さず吊れる虚子の軸
 六月二十日 登高会
 風薫る移転準備の着々と
 十葉の十字に祈る心ふと
 孫を見に来しか守宮の夜毎出づ
 薫風と共に初孫抱き上ぐる
 十葉や人皆十字架を背負ふ

十葉の香を引き摺つてゐる帰宅
 貼り付いて守宮の腹の息遣ひ
 六月二十一日 廣邦会
 初孫を抱きて茅の輪を潜りけり
 鯉船戻る吃水深々と
 末社てふ茅の輪の気品ありにけり
 六月二十二日 青嵐会 東京部会
 雲の峰 惜景として 摩天楼
 青芝を蹴り上げ雀飛び立てり
 幼子の目覚めは早し明易し
 大屋根の反りに薫風曲りゆく
 月下闇家族吸ひ寄せられてゆく
 六月二十二日 野分会 東京例会
 溝浚へして村の四季動き出す
 村総出猫遠巻きに溝浚へ
 六月二十三日 ホトギス社句会
 初孫の先づ見付けしは蟻の道
 早々と命育む代田かな
 極楽の文学の道蟻の道
 六月二十五日 若水句会
 せせらぎも馳走のひとつ鮎の宿
 六甲の句碑に蝮蛇は伽として
 葉柳に水面尖つてをりにけり
 蝮蛇出て山気淀んでゆきにけり
 六月二十六日 目黒学園句会
 カンパニユアマリア観音匿へり
 虎が雨涙は過去を濡らしゆく
 東大寺鹿の子の声に暮れてゆく
 山寺の鐘の余韻やカンパニユラ
 鹿の子にも古都の血統てふ矜持
 六月二十八日 悼徳岡美祢子様御主人様
 これよりは永久の命や虎が雨

雑詠 廣太郎 選

笛鳴つてラグビーに影生まれたる 東京 阪西敦子
 ラガーらの目に一瞬の空戻る 同
 阪急をひと駅ほどの恵方かな 同
 筆はじめ丹田に気を集めつつ 渋川 木暮陶旬郎
 ぶつかつてまたぶつかつて嫁が君 同
 胸筋の反り極まりて弓始 同
 今朝の春バター溶けゆく早さかな 神戸 藤井啓子
 外野手はちよつと退屈いぬふぐり 同
 雨もまたバレンタインの日のリズム 同
 雪降りて子供の世界はじまりぬ 東京 山田閨子
 他愛なき初夢語る姉妹 同
 雪に明け雪に暮れたる大伽藍 同
 表富士から裏富士へ初電車 静岡 須藤常央
 気品あるやうでなき黒初鴉 同
 淑気はや抜けたる鳥居くぐりけり 同
 われは言の葉水鳥は水尾のこす 熊本 岩岡中正
 冬ぬくきことを励みとしたりけり 同
 丁寧な生きて冬帽膝の上 同

風冴ゆる沖へ濃くなる海の面 香川 湯川 雅
 手袋に切符つかめてゐるのやら 同
 寒紅や今日初めての口を利く 同
 健脚でなければど梅に誘はれて 長岡 安原 葉
 日差濃し雪吊解く日近からん 同
 雪国に降りし言訳ほどの雪 同
 初鴉おのが翼を誇りけり 神戸 山田佳乃
 新しき縁を繋ぐ賀状かな 同
 七種の揃ふ道順ありにけり 同
 冬紅葉燃ゆるを忘れてはをらず 東京 保坂リエ
 冬ぬくし逢ひたき人に逢へてより 同
 寒紅や嬉しいときは何時も晴 同
 体温の消されてしまふ寒さかな 福山 竹下陶子
 寒の刀打てる炎となつて来し 同
 るくる師の指は大事と餅菓 同
 書きかけの反古増えゆけり獺祭 東京 田丸千種
 麦を踏む蝦夷の大地をねぢ伏せて 同
 出不精の男の留守や梅の花 同
 大阪のマスクの数に風乾く 神戸 立村霜衣
 漕ぎ出して湖の真中の寒九かな 同
 公現の弥撒に冬日の差し出づる 同
 無窮なる虚子の世界に懐手 相模原 木村享史
 笑はれてすみし怪我なり老小春 同
 日本の庶民に俳句文化の日 同

雑詠句評（五月号より）

大輪のなきを花野の景として 横浜 小川龍雄

花野にはとくに抜きん出て「大輪」の花がないことを花野の特徴としてとらえたところは、ひとつの発見である。そういえばたしかに、萩、芒、吾亦紅その他、花野の花はどれも個々に自己主張はしない花ばかりだが、全体としては大きいのちとして風に吹かれている。これは、大らかに、「花野の景」を、全体としてとらえた句である。

また、逆にこの句のように「大輪のなき」花野と言うことによつて、作者の思いはむしろ、大きな花野の小さな一本一本の秋草に向けられている。つまり、花野の目立たぬ花への作者の共感が見える句である。（中正）

花野に咲く花は、松虫草、吾亦紅等に代表されるように、小さな可憐なものが多いだろう。彩りもどちらかというと少し地味にも感じられるのではないだろうか。時々夏の名残の鬼百合が一輪咲いていたりすると却ってバランスが崩れるような感じさえするのである。正に花野の的確な写生である。（廣太郎）

星冴ゆる星の寿命の果つるとき 神戸 和田華凜

研ぎ澄まされ冷え切った夜空の星ほど心を昂らせるものはない。寒さなど気にならないほど美しい冴え切った星に、心が動かない人はいないだろう。しかし今まで星の寿命まで考えたことはないが、実際、手が触れそうな星でさえ、その距離や寿命を考えた時、想像もつかないほど気の遠くなる数字なのだ。億単位であり、小さい程「寿命」は長いらしい。五〇億年の星もあるそう。作者は科学の目を持った詩人。深く深く見つめるからこそ感覚も研ぎ澄まされてくるのだろう。何億何十億年と輝くからこそ、ふと「果つるとき」の寿命まで思いが及んだらう。思いの深さに感服している。（むつみ）

この稿を書いている時点では、オリオン座の一等星であったベテルギウスの光度が暗くなって、一等星では無くなり、ひよつとしてその星の寿命が尽きるのではないかと話題になっている。今までは最後の輝きであったのだろうか。星のロマンと花鳥諷詠の見事な融合を齎している。（廣太郎）

天地有情

明日終る命でもよし日記買ふ
 クリスマスカード貧しき国に友
 言の葉を奏でるやうに法師蟬
 訝する声に色あり法師蟬
 寒晴の富士のかがやきまのあたり
 日向へと悴む老を労はりて
 携帯酸素などに馴染みて老の春
 骨までと唄ふテレジもお正月
 心にも破魔矢の鈴を鳴らしけり
 新年の歩幅で歩きそめにけり
 悴みを解いて踏み出す一步かな
 餅花に老舗の格の見えにけり
 待つことは苦手にあらず春隣
 舞姫は女権禰宜厄詣
 真紅なる花かごに部屋春めきし
 訳もなくひたすら春を待つてをり
 成人の日の汝が長子寿ぎぬ
 成人の日を渡りゆく太鼓橋

相模原 木村享史
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 三村純也
 同
 同 和田華凜
 同
 東京 山田閨子
 同
 神戸 千原叡子
 同

い子選

玻璃ごしの日は上機嫌冴返る
 時を告ぐ鐘に日脚の伸びしこと
 一雷も雪起しとはならず去る
 異変とて四温の日日の有難く
 ラグビーの母校違へて兄弟
 春近し雨の中より兆す色
 筆つくる雪の少なくなつて来し
 筆塚の一碗の水凍てにけり
 耳を病み眠れぬ夜半の春時雨
 ひたひたと真闇の音や冴返る
 リハビリの儘ならぬ脚初笑
 子ら計る卒寿祝や春隣
 梅を見に来しに満開寒桜
 咲きぬしに違ひなきこと
 寒がりに只もどかしき寒の明
 早春の大气のうねりとめどなく
 夏兆す風むらさきは揺れやすき
 黒々と鴉五月を羽ばたける

東京 高濱朋子
 同
 金沢 藤浦昭代
 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同
 福山 竹下陶子
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 同 河野昭彦
 同
 熱海 嶋田一步
 同
 仙台 赤川誓城
 同
 東京 今井肖子
 同